

平成28年度小地域ネットワーク活動推進会議

テーマ 『 災害時に生きる支えあい 』

1 実践報告

1) 西町ふれあいネットワーク 事務局長 佐々木 智一氏

- ・災害ボランティアセンターでの活動も落ち着いてきたころ、西町の公営住宅の工事に際して家財道具の搬出入や清掃などの作業を西町町内会の住民で取り組んだ活動の報告をしていただいた。
- ・町内会としても高齢化や高齢世帯が多いこともあり、支えあいの活動としては重いものを運んだりという力仕事はあまり参加できる人がいないと思っていたが、回覧で呼びかけたところ、思った以上の人たちが参加してくれた。
- ・町内会の住民にも被災している方もおり、お互いさまの気持ちがあっても手伝うことができない人や、参加のタイミングを逃している方もいる中で、町内会として災害ボランティアセンター活動に参加協力できてよかったと思っている。



2) 南富良野小学校 教頭 小嶋 高德氏

- ・災害発生直後からの避難誘導や避難所となった小学校の様子、被災地域へのお見舞い品（うるうるパック）の配布協力の活動について報告していただいた。
 - ・冠水し始めた頃、教職員で教員住宅や公住の家のドアを叩いて避難するように伝えて回った。
 - ・避難所となった小学校では、小学生や中学生が自分たちにできることは何かないと自発的に動いてくれた様子が印象的だった。
 - ・うるうるパックの配布協力は、保護者もふくめて30名近くが参加し、お見舞い品を渡す係りとVC移転のお知らせを伝える係りと役割分担をして各家をまわった。
 - ・最初はどうも話すことができなかつた子どもたちだったが、回数を重ねるうちに元気に挨拶をして渡すことができた。
- ・篠原辰二氏より、各報告を受けてのアドバイスとまとめ
- ・どの被災地でも、最初に活躍するのは「子どもたち」。自分たちにできることはないか、純粹に行動に移せる。十勝では、断水していた期間に給水車からの水汲みや、自衛隊の誘導などを子どもたちが行っていた。
 - ・「非日常」の中でどう支えるべきかを考えることが大事。
 - ・小さなエリアでのつながりを作ること、一人ひとりが「孫の手」となって、かゆいところに手が届く関係性を地域の中で作ることが大切ではないか。

2 講演 テーマ 『 災害にも強い福祉のまちづくり 』

一般社団法人 Wellbe Design 理事長 篠原 辰二 氏

- ・私たちの暮らしの中で、昔と比べて豊かになった反面、地域のつながりや力が低下したり、生活の質が変化したりしている。
- ・法律で守られる暮らしもあるが、それ以外の部分は地域の福祉で支えあう必要がある。
 - 小地域福祉活動の考え方
- ・「ふだんの・くらしの・しあわせ（ふくし）」を創る視点で地域の支えあいの取組みをしていくことが大切。
- ・日ごろからの「ほおっておけない」気持ちが行動にかわる。その志を持った人たちを地域で育てることも、支えあいの地域には大切。
- ・自助・共助・公助・互助の4つの力で成り立っている生活。自助の弱っている時（災害後）に互助で補う（隣近所の支えあい）
- ・災害の時に守るものは「たった一つの命」と暮らし
 - それがみんなの暮らしを守る・支えることにつながる
- ・災害への備え：防災（堤防や護岸工事）
減災（自分たちの備えや助け合いの力を強くすること）
- ・日ごろ出来ていないことは、災害時にもできない。日ごろからの支えあいを今一度考えて取り組む必要がある。
- ・地域をつくっているのはそこに暮らす人たちみんな。

